TNVN network news
東京日本語ボランティア・ネットワーク
2006.6.9発行 No.54
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1☎03-3235-1171(呼出) 東京ボランティア・市民活動センター メールボックスNo.4

2006年度のTNVN活動が始まりました。

■TNVN総会の開催

第13回総会を2006年4月22日、東京ボランティア市民活動センターで開催しました。出席者は14名、29団体から委任状が届きました。(現正会員数：75団体)

2005年度活動報告・決算報告、2006年度役員選出（2005年度役員が全員再任)、2006年度活動計画（下記）・予算が提出され全会一致で承認されました。

引き続き、王慧槿さん（多文化共生センター東京）に「子どもたちへの高校進学支援について考える」の講演（本号P-2参照）をお願いし、引き続き懇親会では活発な交流ができました。

■今「子どもたちへの教育」が緊急課題です。

この課題について昨年度に引き続き「学齢期児童・生徒の日本語学習支援について日本語ボランティアはいかに活動するか」（PROJECT-1）を重点に、都内で子どもたちへの学習支援に取り組んでいる方々を中心に推進していきます。2006年3月21日に第１回目の“問題解決型のワークショップ”をしんじゅく多文化共生プラザ（新宿区）で開催（本号P-4参照）しました。本年度も多数の関係者を迎えて、引き続き“問題解決型ワークショップ”第２回を6月18日（日）同じ場所で開き、活動の中で抱えている問題の解決を目指して行きます。

■「多文化共生社会」に向けた行政の動き

日本国内に往来・在住する外国人が増え国際化が叫ばれて久しい中、「内なる国際化」で国際交流とは違った、「多文化共生」に関する動きが出てきています。この度総務庁から平成18年3月に「多文化共生推進プログラム」が提言されました。

また都内の自治体（立川市、新宿区、足立区、西東京市、町田市、他）で、実施の段階からと推進計画の提言（中間もふくめ）段階までと、その過程は違いますが、多文化共生社会に向けた地域づくりへの取組が進められています。

その中で、先ず日本で生活して、言葉の壁を感じている人達への日本語学習支援（コミュニケーション支援）が多文化共生の第一歩であるとし、その必要性を挙げています。

自治体の対応は計画段階・実施段階で違っていますが、すでに培われてきた各地域で日本語ボランティア活動をしてる団体への依存は多大であり、メンバーとなり施策の推進の一翼を担うようになっています。

日本語学習支援において多くの面で課題がありますが、日本語ボランティアと行政・自治体との協力体制が出来つつあると感じます。こうした中でTNVNも違った側面から行政・自治体・その他との関わりを深めた活動（PROJECT-2）を続けて行きます。

■多様化に向けて

東京都に居住・往来する外国人は多様化し、国際結婚の方も増えています。日本語学習支援の場を求めてTNVNのHPへのアクセスする内容からも分かります。

最近多くの日本語ボランティア教室で男性のボランティアが増え、活動の中核となって活動範囲を広げています。

一方、日本語ボランティア団体は近隣同志のネットワークを作り活動する地域が増え、行政・自治体へ働きかける力が大きくなっています。これからは日本語ボランティア同士だけでなく、各種の団体・機関・個人とネットワークを組み、多文化共生社会に向けた取組が必要となってきます。これらの動きをTNVNのニュースレターやホームページ、ＭＬ等（定常活動）で発信出来ればと念じています。

2004年に「ボランティア日本語教室一覧2004」の冊子を発行しました。多方面で活用いただいています。本年度は日本語学習支援活動に役立つ情報を加えた「ハンドブック」を作るための調査をします。実施に当たり会員皆さんのご協力を切に願っています。

（梶村勝利）

子どもたちへの 高校進学支援について考える

中学生から中学卒業後に来日した子どもたちを対象に

講演

多文化共生センター東京　王　慧槿

記：TNVN第13回総会で講演をいただいた内容を事務局でまとめました。

多文化共生センター東京では、母語の確立した中学生以上の子どもたちに日本語を教えて、高校に繋げている。

データを見ると

多文化共生センター東京が実施した「東京都23区の公立学校における外国籍児童・生徒の実態調査」で4年間積み上げたデータによると、公立中学校にいる外国籍生徒は中学生総数の1％前後2,000人余になる。なお、この数字には日本で生まれ育った子も入っているため、外国籍生徒が全て日本語に不自由しているというわけではない。次に、都立高校では外国籍生徒数は1,000人を切り、高校生総数の0.6％前後になっている。中学より減少している理由として、私立高校に進学する子がいるためとも考えられるが、最近増えている子連れ国際結婚のケースも多く、高校に進学できない子どもが多くなっていると思われる。また、外国籍生徒は比較的入りやすい定時制高校を選ぶが、最近、新設の定時制（昼間の定時制）に入る日本人生徒が増えてきて、外国籍生徒は夜間の定時制を選ぶしかなくなっている。さらに、統廃合で定時制高校が少なくなる現状を考えると、外国籍生徒にとって高校進学はますます狭き門になってくる。

「たぶんかフリースクール」誕生

多文化共生センター東京では、2005年6月に、母国で中学を卒業してきた子どもたち、また中学に入れてもらえない学齢（15歳）を超えた子どもたちのために「たぶんかフリースクール」を開設した。

高校進学を希望する子どもたちが毎日日本語を勉強しようとしたら民間の日本語学校に入るしかない。しかし、日本語学校は大学受験が目的のため、先生にも、子どもやその親にも高校受験の情報が入らず、そのノウハウもなく困っていた。多文化共生センターは、他のボランティア団体と一緒に年2回（6月と10月）多言語で相談を受ける「進路ガイダンス」を開催しているが、そこで実施した多言語アンケートでも、また個々に受けた相談でも、子どもたちが毎日日本語と高校受験のための勉強をできる場所を切実に求めていることを知り、毎日日本語を学ぶフリースクールを始めた。

始めてから10月までの5ヶ月、夜のクラスには中学生の子どもたちが来ていたが、昼のクラスの生徒は1人のみ、11月からは5人増え、計6人で2月の受験を目指して勉強を始めた。初め、日本の高校の情報もなく、日本人の友だちもなく、日本語を話す場所も限られ、目的が見えなかったためか、子どもたちにはやる気がなかった。1年遊ばせるわけにはいかないので、入りやすい夜間の定時制を受験させようとしたが、全日制に入りたいとやる気を見せ始め、その強気が功を奏し合格できた。

ボランティアが 子どもの日本語支援をするために

大人ははっきりした目的を持って来日し、日本語学習もするが、子どもは自分の意思と関係なく日本へ連れて来られたケースが多いので、どうしてここにいるのか等、子どもを納得させることが重要。また、年少者の日本語支援をするためには研修が必要。興味が持てる教材選び、語学を教えるのではなく、子どもが自分を表現できる日本語を教えたい。子どもはグループで学習する方が効果的。なお、行政はボランティアに任せて安心しているが、子どもにとって学校は必要不可欠。学校は子どもの行動半径を広げてくれる。さらに子どもには教育を受ける権利があるということを、行政に訴える声を挙げてほしい。

＊私の国のことば＊

柴田 アルティミア（フィリピン）

＊耳から

私は日本人の男性と結婚し、日本で暮らして、もう23年になります。日本語を特別に勉強したことはありませんでしたが、日常会話については、それほど難しいとか苦しいとは思わず、簡単なような気がしていました。

夫の友人の奥さんたちが私と同じ年代なので、話が通じたこともあり、彼女たちが話すのをまねして、耳からことばを覚えていきました。

ひとつには、日本語の母音（アイウエオ）とフィリピン語の母音（a・e・i・o・u）が同じなので、聞いた音をまねすることが簡単だったのかもしれません。

日本のことばには、意味は違いますが、フィリピンのことばと同じ発音のものが、けっこうあります。たとえば、「イタイ」（フィリピン語では「お父さん」）、「イナイ」（お母さん）、「アライ」（痛い）、「ババ」（あご）、「バカ」（牛）など、こういうことばを聞きながら、おもしろがって覚えました。

＊目から

でも、会話と違って、読み書きに関しては、とても苦労しました。漢字は自己流で覚えました。もちろん、フィリピンに漢字はありません。

当時は「へん」や「つくり」などをまったく知りませんでした。私は、漢字のなかに「カタカナ」みたいなパーツがあるのを見て、「カタカナ」のパーツの組み合わせとして、形で覚えました。たとえば、「柴田」の「柴」には「ト」「ヒ」「ノ」があるというように。

＊仕事から

仕事は、卵の卸業の会社で事務をしています。おもに、手書きの伝票をパソコンに入力しています。

会社のパソコンはカナ入力で、正しい漢字変換のために正しいカナを覚えなければなりませんでした。でも、このおかげで、読み書きが大事だと思うようになりました。

＊文法のこと

4～5年前から町屋日本語教室に参加しています。はじめ「日本語は簡単」と思っていましたが、続けていくうちに、じょじょに頭がグルグル回るような感じで、文法の難しさを痛感するようになりました。

特に「の、に、を、も、が、は」などの使い方です。そうです！　外国人がにがてな「助詞」です。フィリピン語では、動詞にいろいろな接辞がついて意味が変わりますので、日本語の助詞のような品詞はないのです。

日本語と違う点といえば、ふつうの会話では、だいたい「述語」が「主語」より先に来ます。たとえば、「Angganda nang kanyang damit」〔きれい・あの子（の）・服（は）〕、「Angtamis nang mansanas nagaling Japan」〔甘かった・りんご（は）・から・日本〕などです。でも、「Haponesa si Miss Sato」（佐藤さんは日本人です）と話しますが、書くときは「Si Miss Sato ay Haponesa」と、述語と主語がひっくり返ったりします。

でも、日本語の話しことばと書きことばの違いは、それ以上に難しいと思います。

「です・ます」「である」の区別や、書くときは絶対に使ってはいけないことばなど、決まりごとがたくさんありますね。フィリピン語は、思っていること、考えていること、話していることを、そのまま文章に書くことが多いのです。

＊おわりに

フィリピン人を表すことばのひとつに「Bahala na」（なるようになる）があります。これは、フィリピン人の楽天的な性格と、同時に、あきっぽくて長続きしない性格を表しているかもしれません。

日本語教室では、教科書どおりの勉強ばかりでなく、じょうだんを言ったり遊んだり、課外活動をしたりして、勉強が楽しく身につく方法をとるといいですね。

日本語ボランティアは日本語を母語としない子どもたちのために何ができるか

呼びかけ人 中山 真理子(中野区国際交流協会)

現在、TNVNの会員の中には学齢期の児童・生徒に対して日本語の支援活動をする、又は取り組もうとするボランティア組織がかなりあります。この問題を2005年度のプロジェクトとして取り上げ、3月21日にはしんじゅく多文化共生センターで30余名の参加者を得てワークショップを開催しました。

最初に報告者「八王子にほんごの会」の齊藤さんが、支援者が行政を動かし、八王子市の中学校に「日本語学級」を開設、「日本語支援クラブ」も開設したと報告。得意科目を重点指導し、自信を持たせること。教科指導は母語の分かる人とのペア支援が効果的と指摘。課題は、行政、学校、地域の協力、支援費用の予算化（ボランティア保険、交通費）の必要性などを挙げた。

次に「日本語ぐるりっと」（大田区）の飯島さんが、教科書を教材に日本語の基礎教育を実施、子どもの視点から何を望むかを考え、精神的なサポートもしている。目標達成まで１対１で支援、学ぶ権利の保障を支えていると報告。「ぐるりっと方式」（①日本語初期指導⇒学校生活への適応⇒教科学習への適応⇒自立。②「ぐるりっと」への通級（取り出し）⇒学校への派遣指導⇒放課後「ぐるりっと」への通級）を提案。課題は、スタッフ不足と、情報提供、指導者養成の必要性を挙げた。

その後のグループ討論や全体討論では、さまざまな問題、提案が出された。

① 教科支援については、まず文の行間まで読めるように日本語を確実にすることが重要。日本語力がつくと教科学習能力も自然に上がる。教科支援と日本語支援各々のグループの相互協力態勢が大切。

② 子どもたちの支援については、小学生の場合、自力学習する力や苛められない生活力をつける。中学生の場合、支援は高校入学までで、その後は後輩の学習を手伝うよう仕向ける。また社会人として自立できるように支援する。

③ 来日生を在籍、通級で10人集め、学校の申請で都の加配を受け、日本語学級を開設できるが、まだその数は少ない。学校は行政の活動評価を恐れ、問題を公にしたくないためか。支援者が生徒、親に代わり辛抱強く行政に働き掛けることで実現する。

④ 学校の日本語指導は日常会話までで、教科学習の日本語は、生徒が自力で身につけなければならない。

⑤ ボランティアは、生徒が意味を調べられるように、国語、社会、理科などの字の読み方を教える。また、内容をやさしく説明することも必要。

⑥ 片寄った教科支援や受験用の作文、面接指導だけで日本語が中途半端だと、高校中退率が高い。早期に絶対必要な日本語学習時間数を確保した日本語と教科学習を組み合わせた中高卒業までの系統立った長期プログラムが必要。行政が財政面で無理なこともボランティア組織なら可能。

⑦ 来日生は経済的理由等で都立高校を志望するが、国際高校の20人枠以外特別校はなく、日本人と同様、5科目の試験に加え、他教科も調査書の対象になる。なお、私立高は個々の評価基準で入学を許可する場合がある。

この他にも多くの貴重な意見交換が行われました。今後はコアグループを結成し、テーマを決めワークショップを繋げることにして、熱気にあふれた4時間の会が終了しました。

ネットワーク紹介

『ぶんきょう多文化ねっと』が誕生しました

原田麻里子（ぶんきょう多文化ねっと）

「同じ地域で活動している仲間同士、お互いにもっと繋がりたい。」「情報の交換や共有が必要なのでは？」……そんなボランティアの声から、2006年3月、“ぶんきょう多文化ねっと(通称　ぶんたねっと)”は生まれました。日本語ボランティア、通訳・翻訳ボランティア、外国人相談窓口の担当者、弁護士等の専門家、外国籍の人等々……“ぶんたねっと”に集うメンバーは多彩です。

設立の背景

2006年１月現在、文京区の外国人登録者数は約6,700人、人口の3.56％を占めています。2000年初めの約5,500人と比較すると、20％以上の増加となります。私たちが活動しているボランティア日本語教室や外国人相談等の現場には、言葉や生活上の困難を抱えた多くの外国人が交流や支援の場を求めて来ています。最近では子育て世代の外国人が増え、育児や教育の相談に来る人も少なくありません。

従来、文京区では、文京区国際協会（BIA）が地域の国際化、在住外国人支援のキーステーションの働きを果たしていました。ところが、その協会が2006年3月に解散することが決定されました。これによって、外国人がそのよりどころを失い、地域におけるボランティア活動も孤立してしまうのではないかと困惑の声が多く聞かれました。しかし、こうした懸念はやがて、「これは、私たち自ら地域社会で活動するボランティアにとって、新しいチャレンジの時なのかもしれない！」と、プラスの方向に転じ、“ぶんきょう多文化ねっと”の発足へと発展しました。

“ぶんたねっと”の活動とは

“ぶんたねっと”は、様々な切り口で地域外国人支援活動を実践しているメンバーで構成されています。関係団体及び個人がお互いに連携し、学び合い、協力し合うことで、各自の活動を発展させるため、次の3つの活動を柱に活動を展開していきます。

1. 参加メンバーが情報を交換しあい、相互の連携と協力を進めるための連絡・交流会の実施
2. 外国人の抱える課題、地域外国人事情、多文化共生社会にむけた活動、日本語支援などの勉強会やシンポジウムの実施
3. 外国籍住民からの日本での生活等に関する相談に対応

～これから～

国際社会のグローバル化の進展、そして国境を越えた人の移動は今後ますます盛んになっていくものと思われます。日本国内においても、外国籍住民は今後着実に増加していくでしょう。こうした流れの中で、外国人を私たちと同じ住民として受け入れ、外国人にとっても住みやすいまちをいかに創っていくかは、これからの地域社会にとって今まで以上に大きな課題となるはずです。

2003年に文京区が実施した外国籍住民に対する調査では、約三人に一人の外国人が差別･偏見を感じているという結果が出ています。彼らの多くは、日本人住民との日常的な交流を希望し、生活情報を得ることを求めています。地域における外国人支援は、日本人、外国籍住民が同じ地域社会に住むもの同士が、まずはお互いに知り合い、理解しあうことが出発点になります。参加メンバーが、日頃はおのおののボランティア活動を着実に行った上で、ゆるやかなネットワークで互いに連携することにより、多文化で暮らしやすいまちづくりにむけて活動の幅を広げていきたいと考えています。

“ぶんたねっと”はまだ船出をしたばかりの小さな団体です。今後、行政との連携も視野に入れながら、じっくりと活動に取り組んでいきたいと思います。“ぶんたねっと”―このほのぼのとした、暖かい響きを多くの人が共有することから、きっと何かが生まれるのではないかと夢をふくらませています。

●お問い合わせは下記まで
info@bun-ta.net

nice to meet you

国籍を問わず、出来ることで助け合う会

NPO法人IWC国際市民の会

伊藤美里(品川区)

IWCは1983年国際婦人クラブとして港区で発足。在住外国人が地域の人々と生活習慣の違いを理解し合って共生できるように、生活相談や幼児同伴可能な日本語教室等を始めました。

1986年、都心再開発のため本部を港区から品川区の元音楽学校に移しました。

1990年、会長が品川区教育委員に推薦され、区立の小中学校に日本語が分らない外国の子ども達がいることを知り、この子たちへの日本語教育の必要性を痛感し、教育委員会や学校に図って、世界仲良し学級を始め、2年後に午前中の取り出し授業（JSL）を自主活動で始めました。

1998年、品川区教育委員会はこの教室を正式な委託教室と認めました。

1999年、NPO法人となり、多くの外国籍の子どもや帰国子女に、日本語及び学校生活適応教室を指導し、100%希望する高校に入学させています。既に大学を卒業して当会の活動に参加している者も数多くいます。当会の日本語教師は、教師養成講座の終了者(当会でも年2回養成講座を開催）で、当会でインターンを経験した方々です。

また、在住外国人への生活・就学相談、企業の外国人研修生の日本語指導、病院の医療通訳依頼への対応等々、きめ細かい支援活動をしています。これらの活動は基本的に有償ボランティアの形を取っています。

この他、国際理解を深めるインターカルチュラルパーティを隔月に開き、各国、各方面の識者の話を聴き、ポットラックパーティの形式で講演者と一緒に歓談する会や、外国人会員が先生をする語学教室、合唱グループ「コール・ムンディ」や、和太鼓のグループ「花太鼓」などの文化交流活動も活発です。この活動が世界平和の礎となる様に一同頑張っています。

会　員　団　体　紹　介

Nice to Meet You

nice to meet you

学習者の層が大きく変わってきました！

芝久保日本語教室

市川榮二（西東京市）

今年で12年目に入った私達の日本語教室では、いままでに20カ国以上の国から来日した外国人と一緒に日本語を勉強してきました。そして学習者の大半は中国や韓国などの若い就学生で、そのほかに国際結婚をした人や若干のビジネスマンなどでした。しかし2年位前から学習者の構成が大きく変わってきました。日本に派遣されてきたインド人プログラマーが4～5人の他、技術研修で来日したメキシコ人やインドネシア人大学院生も参加し、一方で就学生が減少して、この4月の時点ではゼロとなりました。

私達の教室は、暑い8月を除く毎月第1～3土曜日午後1時から開催し、毎月第１土曜日には学習の後、お茶会を開き学習者間の親睦や雛祭り・七夕などの日本文化の紹介をしたり、さらに一年に一回スピーチ大会も開いてきました。

一方、ボランティアは現在９名ですが、市主催の養成講座を受講し、或いは学校に通ってレベルアップを図ってきています。元サラリーマンや子育て経験者は若い外国人に単に日本語を教えるだけではなく、各人の経験をいかして色々な相談にものっています。

私達の教室を開設し長年代表を勤められた明石佐和子さんが半年前に急逝

され、苦楽を共にしてきたボランティア仲間はすっかり落ち込んでしまい、その上、学習者が昨年後半には一時的に2～3人に減少しました。しかし皆さんのＰＲ活動が実ったのか、この4月から学習者が14人前後に急増し、目下、嬉しい悲鳴をあげています。これもボランティアの皆さんの熱意と学習者に対する親身な気配りの賜物と思っています。

日本語ボランティアの現場から

学習者の声

高校入試

前田粋夢（すいむ）・フィリピン
初歩日本語（練馬区）

私は日本で生まれました。四才のときお母さんの国フィリピンにおにいさんといっしょに行きました。そしておじさんおばさんのかぞくといっしょにくらしていました。　おばさんのかぞくは四人、おじさんは一人でした。

そこでエレメンタリー・トリリアーナにつうがくしました。そして、十四才の六月の時、日本にかえって来ました。日本の中学校の二年生に入りました。

それから、すっかりわすれていた日本語をべんきょうし、中学校のべんきょうもして、高校入試をうけることになりました。それまでの間、いろいろな人のおせわになり二月二十三日のしけんをうけました。三月一日の合格の発表を見てほんとうにうれしかったです。日本に来てからのいろいろなことがおもいだされてすこしなみだがでました。

高校に入学したらいろいろべんきょうし、おともだちをたくさんつくり、しょうらいの夢、ホテルマンになれるようにがんばります。

小川さんとの約束
高校卒業のときは英検二級に合格していること

粋夢さん

ボランティアの声

『高校入試』を支援

小川伶子
初歩日本語（練馬区）

勇一君

私が、外国でくらしていた日本語が出来ない十代の子供と接したのは、もうずい分前になります。日本人と結婚した母親に連れられて日本に住む様になった子供たちです。よしあしは別としてなんとか早く学校生活に慣れないとなにか不幸なことが起きる様な予感がして緊張したことを思い出します。

先ず、子供たちの不安をやわらげるために、笑顔、笑顔で接し、日本人はやさしい人たちだと思ってもらうことに力をそそぎました。

以来、中学生、小学生、未成年の少年少女たちが、一人なんとかなると又次にと教室に来る様になり、若い人の声でいつもにぎやかです。前記の粋夢（すいむ）さんは一番最近の成功例で、本人の努力はもちろんですが、私の教室のスタッフ、一緒に勉強している大人、子供たち、そして中学校の教職員方の力、高校の先生の親切などいろいろな人の支えで、日本語が全然出来なかった十四歳の女の子が、一年ちょっとで高校入試に成功しました。

粋夢さんには兄がいます。兄の勇一君は妹の帰国より一年前にもどりました。その時は年齢の関係で日本の中学校に入ることが出来ませんでした。学区の中学校に掛け合ったのですが、どうしてもだめでした。でもその中学校は以前私の所に来ていた男の子を入れてもらった経緯があり、とても好意的で勇一君のために夜間中学へ行かれる橋渡しをしてくれました。勇一君は夜間中学へ通学し、妹の粋夢さんと同時期（今春）都立高校の夜間に入学出来、兄妹そろって都立高校生になりました。

以前にも感じていたことですが、高校は定時制の先生方のほうが、私の教室に集まる様な子供たちに理解があるのです。もちろん学力のことなど考えると全日制に入るのは無理かも知れないのですが、それだけではないよう様に思われます。思いやりのある言葉を子供たちや母親にかけてくれ、ほんとうにこの高校へ入学させてやりたいと思いました。

前田粋夢さんのことは、中学の三者面談の時から話し合いに入れてもらい、本人の希望を何回もたしかめた上、中学、高校側に伝えられたことがよい結果につながったと思います。やりすぎかなと思われる位のかかわりがないと、よい結果は出ないと思います。

今春大学を卒業し社会人になった女の子、大学・専門学校在学中の女の子、都立高校全日制二年生の男の子、小学五年生の女の子など、思い出される子供たちがたくさんいます。今も何人かの未成年の少年少女がきてくれます。念ずることは、ただただ未来に幸あれと！！

NETWORK INFORMATION

●2006年度役員とスタッフ

＊第13回総会（2006.4.22）にて新役員が決まりました。2005年度の役員がそのまま継続してTNVNを運営して行きます。
皆様のご支援・ご協力をお願いします。

◆**代表：梶村勝利**（早稲田奉仕園日本語ボランティアの会／新宿区）
◆**副代表：岩佐幹彦**（協力会員：江戸川・平井にほんごサークル／江戸川区）
◆**事務局長：林川玲子**（ビバ日本語教室／港区）
◆**会計：床呂英一**（まちだ地域国際交流協会／町田市）
◆**会計監査：竹田仁之介**（田無国際交流サークル／西東京市）
◆**スタッフ**（事務局担当、ニュースレター担当、IT〈HP,mail〉担当）として、定常的に協力を願っています。
岡田美奈子（やさしい日本語／江東区）、小川伶子（初歩日本語／練馬区）、大木千冬（町田日本語の会／町田市）、福井芳野（小平日本語の会／小平市）西岡暉純（協力会員）、鶴田環恵（在宅）、大滝敦史（在宅）、松川彩子（在宅）、溝口明子（在宅）

ニュースレターの記事をお待ちしています

ニュースレターは3ヶ月毎に発行しています。会員皆様をはじめ日本語学習支援に係わる方々への情報提供・交換の場として紙面を作っていきます。
日本語学習支援、日本語ボランティア活動、地域での多文化共生についての動き・取組みなど、ご意見・紹介・情報などの記事を、また学習者からの記事など色々な側面から、団体・個人にかかわらず、是非お寄せ下さい。
52号で「男性の活動の場」、53号では「子どもの学習者」に関する記事を特集しました。本号も「子どもたちへの学習支援」についての記事載せました。今後の記事についてのご意見・ご希望も歓迎します。
TNVN NL編集担当宛にお送り下さい。

事務局から…ニュースレターを送っていただいています

TNVN会員団体から定期的に会報が送られてきます。活動を通して、学習者・支援者・関係者がお互いに情報を共有するために会報を作り、お互いに会の動きを確認することは非常に大切なことですね。
最近TNVN事務局宛にお送り戴いているニュースレターから３団体を紹介します。

●日野国際友好クラブ会報

「Small World」Vol.57 2006.2.26
イヤーエンド・パーティ、イベント・旅行、日本での生活、はじめまして、MALAYS ENGLISH、国際理解講座＜国際クッキング＞と各記事を学習者が実感を込めて書いています。会員コーナーでは「オノマトペの世界」が取り上げられ学習指導・教材に参考となります。ここから「日野友好クラブ」の活発な活動が伺えます。
ホームページ
http://homepage3.nifty.com/hkyc/

●MIFA　まちだ地域国際交流協会

Vol.II No.56 May 2006
語学・友好を軸に活動、事務局の広報担当が「MIFAニュース」を毎月発行。
平成18年度総会、会員寄稿（学習者・支援者）、学習者からの投稿、元会員からの教材紹介、会の報告など盛り沢山の記事を載せています。
ホームページ
http://www.geocities.jp/mifaworld/

●八王子にほんごの会　NEWS

No.123 2006.3.22
八王子市の地域に9教室（寺子屋）と個人対応で活動。会報からは幹事会の運営や研修部活動、各教室間の相互の結びつきの強さが伺えてきます。それぞれが抱える課題や状況を共有すると共に、「て・ら・こ・や」で各教室の動き、学習者会報「ともだち」が学習者と会員の協働で発行等、学習者と支援者との結びつきへの気配りがされています。

他にもニュースレターをお送り戴いています。以後続いて紹介していきます。（K.K）

東京日本語ボランティアネットワーク事務局

TNVN東京日本語ボランティアネットワークはボランティア日本語学習支援活動を行っている団体のネットワークです。TNVNの会員はそれぞれ地域での日本語学習支援活動を通し、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人などを、隣人として支援しています。TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆**日時**：毎週金曜日
第1、第3、第5 金曜日／午後2時～4時
第2、第4 金曜日／午後2時～6時

◆**場所**
東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄（東西線・有楽町線・南北線・大江戸線－出口B2b）飯田橋駅下車
セントラルプラザビル　10F ロビー

◆**日本語ボランティア相談窓口**
日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフがお応えしています。電話でご確認の上、気軽にお越し下さい。また、メールでのお問い合わせにもお応えしています。
ご意見もお待ちしています。

〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス　No.4
●TEL：03-3235-1171
（呼出：金曜日活動時間帯のみ）
●FAX：03-3235-0050
●E-mail：webadmin@tnvn.jp
●URL： http://www.tnvn.jp/
●**郵便局払込**
口座番号：00100-1-719259
加入者名：東京日本語ボランティア・ネットワーク

●**新会員紹介**
正会員／東久留米にほんごクラス（東久留米市）

●**会員数**（2006年5月13日現在）
正会員：75団体　協力会員：48名
賛助会員：4団体

●**編集**／岩佐 幹彦、大木 千冬
岡田 美奈子、小川 伶子、梶村 勝利
床呂 英一、西岡 暉純、林川 玲子
●**レイアウト**／鶴田 環恵